

第 17 回日本在宅医学会もりおか大会 一般・指定演題

(研究報告) 抄録用紙

演題名 (全角 80 字以内)	消化器内科、訪問看護、訪問診療、ホスピス（緩和ケア）が連携して看取った胃がん患者の一例
演者名	水間 美宏 1)2) 久木田和夫 1)3) 福島豊実 2) 山形謙二 3) 井上孝子 4) 湯田久美子 4)
所属	1) 神戸アドベンチスト病院訪問診療 2) 神戸アドベンチスト病院消化器内科 3) 神戸アドベンチスト病院ホスピス（緩和ケア） 4) 神戸アドベンチスト病院訪問看護ステーション

研究方法 (右から番号を選び NO. 欄に番号をご記入ください)	1. 症例報告 2. 症例シリーズ報告 3. コホート研究 4. 症例対照研究 5. 調査研究 6. 介入研究 7. 二次研究 8. 質的研究 9. その他研究	NO.
		1

<p>目的 がん患者の在宅医療と看取りにおけるひとつのあり方を示すこと</p> <p>方法 症例：90歳代、男 既往歴：特になし 原病歴：亡くなる2年4ヶ月前に吐血し、当院消化器内科を受診し入院した。 治療内容 胃噴門部がんと診断されたが、超高齢のため手術は受けずに退院し、消化器内科に通院するとともに、当院訪問看護ステーションからの訪問看護を受けた。亡くなる9ヶ月前に、嘔吐のため当院消化器内科に入院した。胃噴門部がんによる狭窄が嘔吐の原因と診断され、狭窄部に内視鏡的に金属ステントが留置され、経口摂取できるようになったので退院し自宅に帰った。 経過：亡くなる2ヶ月前に、がんの進行のため通院が困難となり、消化器内科に入院した。本人は在宅医療を強く希望したので、退院して訪問看護に加え訪問診療を受けることになった。超高齢の妻と二人暮らしで、妻からは最後は病院で看取ってほしいとの希望があった。亡くなる3日前に経口摂取できなくなり、本人と妻の希望にて当院ホスピス（緩和ケア）病棟へ入院した。静脈注射が困難なため、副腎皮質ホルモンと1日200ccの輸液を皮下注射し、特に苦痛を訴えることもなく、妻に見守られながら亡くなった。 考察：手術不能な超高齢の胃がん患者であったが、消化器内科で緩和内視鏡治療をして経口摂取が可能となり、訪問看護をすることで、自宅での生活が可能となった。また、がんの進行によって通院が困難になったあとは、訪問診療を開始することで在宅医療を続けることができた。超高齢夫婦のみの家庭であり、在宅での看取りは困難であったが、ホスピス（緩和ケア）病棟に短期間入院することで、苦痛もなく妻に見守られながら看取ることができた。以上、自宅での介護力が乏しい超高齢胃がん患者において、消化器内科、訪問看護、訪問診療、ホスピス（緩和ケア）が連携することにより、より長期に在宅医療を行えたことは貴重な経験と考えたので報告する。</p>
